

伊達宗城とその周辺 (続)

—— 岩瀬忠震・永井尚志ほか ——

河 内 八 郎

前号に続いて、伊達宗城をとりまく諸人脈のうち、目付岩瀬忠震をはじめ、何人かの幕臣からの書状を見ていきたい。

五、岩瀬忠震書翰補遺

一七、（安政五年か）某月八日

（宇和島伊達文化保存会蔵「名士書簡、一、串字題」Ⅱ鈴村譲関係史料、巻子、一一点の内の第二）

郁書謹誦、益御多祥、抔賀之至

○連筒望遠鏡、如命応接可仕候得共、頻ニ望人有之様子、チト條約に至兼可申哉と相察申候、其訳ハ、函館にて先般、トルラル代りに右の品を出し候ニは、大抵十五丸之代りニ出し候由、彼老火砲も伝聞致し居候へば也、兎ニ角、一応接可仕候

○箱館へ御注文之筒云々、敬領仕候、若敷金人用も候ハ、可申上候得共、多分夫ニは及申間敷と奉存候、ボード、ホー

イッスル船、陸東卷玉箱等、皆具凡百金以内ト申ス事也、之ヲ都下ニ比スレバ、其廉甚シ

○御別紙之趣、敬領仕候

○昨日申上候、薄手羅紗ハ、最早無之候由ニ候

只今退出、来寶有之、大略御尊許奉祈候、頓首

八

震

拝復

二白、御端書之趣は、決而漏泄不仕候間、御安心相願候、乍憚、何分此義者太早計ニ被 過候忤被奉存候、今一層の御賢考有之候而者如何、

西地もヤ、折合可申候兆も有之、旁回天の御昇中、此時最モ肝要ニ可有之候、何卒、為三百年徳沢、御再考有之度と奉存候、段々任御懸命、贅言御免可被成下候、頓首

謹言

内容 一、望遠鏡入手の件（前号の三、四、五などに関連か）

一、注文の「筒」の件（前号の五、六、七、八、九などに関連か）

一、別紙（所見なし）の趣承知

一、端書の件（未詳）は決して漏泄させず

一八、（参考）（安政五年か）月日未詳 橋本左内宛

（同前、一一点の内の第三）

副啓、小生昨年長崎御用にて、彼地へ相越、帰途天草ヲ究め、肥後地より、追々泉播淡・肥・志・勢州迄見分、往返之図巻凡三百図ニ及申候、此節清書出来ニ付、奉入御覽度候処、老冊越中殿へ参候為、いまだ戻り不申候間、其内御慰ニ可差出とも奉存候、

右之題字、何共恐入候得共、御揮毫之御序も御坐候節、御一筆相願度、爵絹差上置申候、頓首

震

(奥封ウワ書)

「橋本兄

巖

親析

鈴

内容(一、前項の岩瀬より左内宛の書状の別紙か)

(一、安政四年九月の岩瀬の長崎行||対ロシア交渉||について語る。従って安政五年ならん)

一、長崎からの帰途、肥後から、和泉、淡路、志摩、伊勢等見聞図三〇〇を作成、越中守(大久保忠寛か)から戻りし後に、呈覽に供せん、その題字揮毫を依頼

六、安政五年前半の岩瀬忠震の動静記録

宇和島伊達家文書の中に、岩瀬忠震にかかわるものが比較的少ないことは、これまで触れて来た通りである。他方、現在われわれが見ることのできる、同人に関する記録は、越前松平家関係に遺されたものではないかと思う。福井市立

郷土歴史博物館の所蔵する松平春嶽関係（「春嶽公記念文庫」から引継ぐもの）、越前宗家関係（松平宗家から移され「越葵文庫」として保存されるもの）、橋本左内関係（橋本家から「春嶽公記念文庫」に移管されたものを引継ぐもの）などの文書群の中に、岩瀬忠震から橋本左内に宛てた書状など、安政五年の四月から七月に至る多くの文書がある。ちょうど、ここに紹介した伊達家の同人書状とも相互に関連するものが多い。『昨夢紀事』（「日本史籍協会叢書」四冊）の「三」と「四」及び、『橋本景岳全集』（復刻「統日本史籍協会叢書」三冊）の「二」によって、その大要を知ることができるが、以下、若干それを整理してみよう。『昨夢紀事』は刊本Ⅱ「昨」と記すⅢ、四とその頁、『景岳全集』は刊本Ⅱ「景」と記すⅡの文書番号を示す。

安政五年

四月十三日――橋本左内、岩瀬忠震を訪う。昨年左内の京都滞在（左内は五年四月三日京を発ち、十一日江戸へ帰着、十二日松平慶永に召さる。岩瀬は四年九月の長崎対露交渉の帰途、九月末、京で左内を訪ねる。）（「昨」三、二九二頁）
中の約束で、再会を申入れる。

四月十三日付――岩瀬書状、橋本左内宛（「昨」三、二九二頁。「景」二、四五〇号）

四月十五日――慶永登城、営中にて、岩瀬に会う。（「昨」三、三〇一頁）

四月十九日――慶永、左内を岩瀬の許へ遣わす。岩瀬は、堀田老中の明二十日の京からの帰着を待っての幕閣の決断の空気を伝える。（「昨」三、三四五―六頁）

四月二十一日――岩瀬忠震書状、橋本左内宛（「景」二、四五二号。清和念一、蟾洲、橋本盟兄）

四月二十三日――井伊直弼大老職を命ぜられる。夕、岩瀬の部下平山謙二郎、その内意に基いて左内を訪問、「満朝盡

く不服」と伝う。永井・鵜殿・岩瀬は既に「憤激に堪へ兼、……掃部（井伊）ハ其器にあらず……と抗言詰問」。

（「昨」三、三五九頁）

四月二十六日付 — 岩瀬忠震密答、橋本左内宛（廿六日、蟾洲、橋本兄）（「景」三、四五六号。「昨」三、三八三

頁）。この日、水野筑後守（忠徳）より慶永宛書状にも、慶永が岩瀬に接触することへの警戒論あり。（「昨」三、三

八四〇五頁）

四月二十七日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（念七、桂痴、端原盟兄）（「景」二、四五九号）

同、四月二十七日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（念七、紫気、橋本兄）（「景」二、四六〇号）

四月二十八日 — 今宵慶永、兼ねての約束通り、左内を岩瀬の許へ遣わす。宇和島伊達家とくに入道春山（宗紀）と井

伊家の関係などについて議論（「昨」三、四〇一頁）

五月三日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（五月三日、巖瀬、橋本兄）（「景」二、四七六号。「昨」四、二〇頁）

五月五日 — 慶永登城、営中にて、岩瀬不遜の次第ありとの不評を聞く。（「昨」四、二五頁）

五月五日付 — 岩瀬忠震書状、慶永宛（重五、岩瀬震、福井公台下）（「昨」四、二六頁）

五月五日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（重五、蟾洲、橋兄）（「景」二、四七九号。「昨」四、二六頁）

五月八日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（八日、蟾洲、橋本兄）（「景」二、四八一号）

五月九日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（九日、月地、築地）（「景」二、四八二号）

五月十四日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（十四、桂痴、端元兄）（「景」二、四八七号）

五月十四日付 — 溝口藏人（孤雲、熊本藩士）書状、岩瀬忠震宛（五月十四日、溝口藏人、肥後守様）（「景」二、四

八八号）

五月十五日付 — 溝口藏人書狀、岩瀬忠震宛（五月十五日当日奉祝、溝口藏人、肥後守様）（「景」二、四九二号）

五月二十二日 — 夕、左内、岩瀬のもとへ往く。岩瀬は、「条約調印済迄も在職覚束なく、永井・堀も近々外転にも成るへきか……」と大息す（「昨」四、七八〜九頁）

五月二十四日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛（念四、蟾洲、把志猛特兄）（「景」二、五〇一号）

五月二十八日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛（念八、爽快、松懶長契）（「景」二、五〇四号。「昨」四、九九〜一〇一頁）

〇一頁）

六月三日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛（六月三日、桂拝、松兄）（「景」二、五一三号）

六月五日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛（五日、蟾洲）（「景」二、五一四号）

六月十一日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛（旬一、復）（「景」二、五二三号。「昨」四、一六八〜九頁）

六月十八日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛（六月十八日、桂痴、端元兄）（「景」二、五三八号。「昨」四、一八五〜一八六頁）

〇六頁）

六月十八日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛（十八日、桂痴、端元兄）（「景」二、五三九号。「昨」四、一八八頁）

六月十八日付 — 岩瀬忠震書狀、松平慶永宛（十八、震、復威公閣下）（「景」二、五四〇号。「昨」四、一八八〜九頁）

頁）

六月二十日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛（念、紫気、端兄）（「景」二、五四四号）

六月二十日付 — 岩瀬忠震密翰、松平慶永宛（念日、震、復威公閣下）（「昨」四、二〇〇〜三頁）

六月二十日 — 同夕、岩瀬肥後の密旨を受け、平山謙二郎、左内方へ罷越し、密話の大概（「昨」四、二〇三〜五頁）

六月二十三日付 — 岩瀬忠震書狀、橋本左内宛、別書「外国軍艦函館渡来之風説書、其外長崎蘭人之事情風説付」（念

三、紫氣洲、端兄）（「景」二、五四八号。「昨」四、二四五～六頁、但し「別書」は無し）

六月二十三日付 — 岩瀬忠震書状、松平慶永宛（念三日、震再白、復威公閣下）（「昨」四、二四一～二頁）

六月二十四日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（念四蚤天、紫氣、端元文盟）（「景」二、五五〇号。「昨」四、二五

九頁）

六月二十四日 — 慶永、當中の風説を聞かせんがため、左内を岩瀬の許に遣す。（「昨」四、二七〇～一頁）

六月二十四日付 — （右と入れちがいに）岩瀬忠震書状、松平慶永宛（念四日、震、復威公閣下）（「景」二、五五二

号。「昨」四、二七二～三頁）

六月二十日付（前書の副書か） — 岩瀬忠震書状、松平慶永宛（三白云々）（「景」二、五五三号）

六月二十八日 — 平山謙二郎、橋本左内の許に來り、岩瀬忠震の建策について論ず。大老・閣老は海外の事情に疎く、対ロシア条約等、諸外国との事務延滞して、大事を誤らんとする勢のため、別に「海防」の一局を開き、宇和島侯

（伊達宗城）をその局の総裁として推すこと。宇和島侯よりも大老へ、外国事務局開局の建議を行い、その問題を

「衆議」として議論させること、など。

七月三日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（七・三、Higo/Sanai 様＝ローマ字使用）（「景」二、五七二号。「昨」

四、三二八頁）

七月五日付 — 岩瀬忠震書状、橋本左内宛（四日夜認置、秧（左内）兄、彦（肥後））（「景」二、五七六号。「昨」

四、三三三～四頁）

この中で、六月二十八日に、岩瀬の下役平山謙二郎が、岩瀬の意向を受けて、伊達宗城・橋本左内、そして松平慶永

の間を動いた、海防局又は外国事務局の開設と、そこへ総裁として伊達宗城をかつぎ出そうとする動きについて触れておこう。「昨夢紀事」は、平山は既に宗城の許を訪れて、その岩瀬の建策を伝えたことを「此事字侯へは、唯今参りて、及陳啓、御同意、猶又 公の思召を伺い奉る由を申たり」と記し、宗城が同意し、公（慶永）の同意を求めて来たとしている。そして、慶永から宗城へ、「同意」の段を返書にしたとして、次の書状を引いている。（「昨」四、二九七頁）

(A) 謹読仕候、如御教示、諸勢依然中窮迫ニ至候処、閣下愈御勝康、奉抔賀候、陳、巖瀬（岩瀬忠震）下吏平謙（平山謙二郎）、弊家より直に端元（橋本左内）迄罷越、縷々申述候、陳情、達賢徳、実ニ不可棄之勢、扨々御痛憤之極ニ御坐候由、御同意、困窮仕候、扨、密策之事も、御別慮無御坐候旨、驚力丈、及説得可申、成否ハ、当今之意味にて候ヘハ、尤不可必御坐候、酒若（酒井若狭守忠義、京都所司代）は、以僕いやニなり候故、説話御断申候、久（久世広周、老中）ヘハ尽力可仕候半、裡面より緩穩之内ニ、厳正相含、牛（井伊直弼、大老）久（久世）ヘ陳論、何卒表面ニ、外殿事務局出来仕候様、希望ハ致候得共、不可測候

○魯之条約も、早々いたし候様、被仰遣候由、久氏（久世）御尤奉存候、兄今出門懸、匆略奉報迄、如此御座候、頓首

即

二白、中略、昨夜玄朴参、此間再出より、両度固陋、当惑至極之密話計、尚講話師と心得、一夕洋事情、説得之事申含置候、細密ハ、期御面晤候、以上

この書状は、松平慶永から伊達宗城へのものであるから、その実物は、宇和島伊達家の側に遺っているべきものである。伊達家文書の松平春嶽書状の中に、それに関する、次のようなものがある。

(B) (安政五年六月)二十八日付、松平慶永書状、伊達宗城宛(原本)

(封筒)

楠 軒 公

静 軒

乞親析

謹呈尺翰候、諸光霽濛之秋ニ候処、閣下倍御清安被成、御起居、奉寿候、陳者、巖勢(岩瀬)下役平鎌(平山)貴家より直ニ端元、八家僕ノ姓左也、(橋本)迄罷越、一々承之、実不可棄之勢と相成、今更ニ可驚苦候者無之候得共、扱々痛憤之極ニ御座候、平鎌之咄、足下之神策一々敬服、急度御同意申上候、何卒早々御施術相成候様、所希ニ候、外国事情詳密愛牛(井伊直弼)へ御説得、其外之運策も能々御申被成候可宜、酒若(酒井忠義)へも從吾子(慶永自身のこと)御説得、是又御同意申候、外ニ愚存無之候、賢考都而御同意候

○酒若之事ハ、乍内々御心得ニ申上候、過日尾・水ニ藩急登城(六月二十四日、水戸徳川斉昭・慶篤、尾張徳川慶恕不時登城)有之候節、酒若も尾・水より御相談有之候、至極尤之事、若申候由、然ル処、実者閣之細作ニ而、御座之間之御三之間へ屏風ヲ置廻シ、愛牛と久(久世)と、外ニも御三家之応酬方を議し候由、依之若を細作となし、二藩之口氣を探り申候、若夫より屏風の裏へ入り、共ニ議し候と申事承之候間、油断ハ難成候間、其思召ニ而、若へは御応接有之度、却而閣之味方ニ候ハ、御施術ニハ都合宜かとも奉存候

魯の条約も、昨日久へ早々いたし候様申聞候義ニ御坐候、平鎌伝言ニ付、右御同意貴答如斯ニ御坐候、何分々々、為宗家御神策所希願ニ候、不具拜

廿八

養賢

藍山依頼君

二白、今夕趙翁君(永井尚志か)も被為入候由、何分宜奉希候、尚又御伝声所希候、已上

伊達宗城とその周辺(続) — 河内

上

(奥封ウワ書)

「
✓

天下柱石依頼 藍山君閣下

永

乞親析

「

(A)と(B)を比べると、(A)は「昨夢紀事」の編集過程で宇和島伊達家を調査して書写したものを利用したか、越前家に残った控か下書によったものかと考えられるが、部分的に文言が合致はするものの、全体ではかなりの違いがある。(B)の後半は(A)では略されている。しかし、(B)は、そのとき慶永から宗城に送られた、外国事務局総裁役への引出しに同意を求めた、当該のものであることは間違いない。

六月十九日の、日米通商条約調印、二十二日一橋慶喜と田安慶頼、二十四日水戸斉昭・慶篤と尾張慶恕の不時登城、大老井伊直弼をめぐる諸勢力対立の激化する中で、その空気的一端が伝えられている。

七、伊達宗城宛、永井尚志書翰

次に、岩瀬忠震の目付同僚で、安政四年十二月三日勘定奉行に転じている永井尚志（岩之丞、玄蕃頭）の書翰をとりあげる。宇和島伊達家には、宗城宛一点、戸田忠至宛一点の、計一二点が遺されている。

何れも、伊達家「御重書 丙」の「御書翰類」の中の原本である。なお、同家の稿本「御書翰類」全二六冊の当該部分を参考にした。

永井玄蕃頭尚志（なおむね、一八一六—一八九一）は、文化十三年十一月三日生。伊達宗城とは同年生れの岩瀬忠震より二歳上である。松平主水正乗尹の子で、天保十一年、二十五歳で、使番永井求馬尚徳の養子となる。弘化四年から先ず、番士として勤務、老中阿部正弘に抜擢されて、嘉永六年十月、目付となる。嘉永七（安政元）年から安政四年まで三年間の、長崎海軍伝習所勤務は、彼の履歴に大きな光りを添える。

勘定奉行を経て、安政五年七月八日、新設の外国奉行に転じるが、同時に任せられたのは、水野筑後守忠徳、井上信濃守清直、堀織部正利熙、それに岩瀬肥後守忠震、そして永井の五名であった。六年二月軍艦奉行に転じた後、いわゆる安政大獄に連座して、六年八月二十七日免職、差控えとなった。

三年後の文久二年八月、再登用され、京都町奉行となるが、在京のまゝ大目付となり、第一次・第二次征長役の処理に重要な役を果し、將軍となった慶喜のもとで、若年寄として補佐役をつとめ、大政奉還、鳥羽伏見戦、江戸帰国と、旧幕府側の收拾役をつとめたが、慶応四年八月、榎本武揚に従って箱館戦争に参加、翌明治二年五月降伏、捕われ、東京に送られ、五年正月まで逼塞し、後開拓使、元老院書記官等を歴任、明治二十四年七月一日、七十六歳で没した。晩年まで宗城と接触のあったことは、ここに示す書状、とくに最後の二点が物語る。

ここに見れるのは、何れも文久二年以降、彼が再役を許されて京都町奉行に任ぜられてからのものである。

○永井尚志（岩之丞、玄蕃頭、主水正）の職歴

・御小姓組牧野筑後守組進物番（御先手能登守倅／＼養子）、岩之丞

・嘉永六丑・七・二十、任徒頭

・同年十・八、任目付（海防掛り）

・嘉永七寅・四・五、長崎表へ御用として遣さる。

（長崎海軍伝習所の監理として三年間、幕臣・諸藩士へのオランダ海軍兵術の伝習にあたる。四年三月、第一期伝習生一〇五名とともに観光丸で帰府）

- ・ 安政二卯・十一・十九、諸大夫仰付けらる。玄蕃頭を称す
- ・ 安政四巳五月帰府
- ・ 同 年十二・三、任勘定奉行
- ・ 安政五年・七・八、任外国奉行
- ・ 同 年八・二十三、アメリカ国と条約取替し遣さる
- ・ 安政六未・二・二十四、任軍艦奉行
- ・ 同 年八・二十七、御役御免、部屋住、御切米召上げられ差控え
- ・ 文久二戌・八・七、（再召出）京都町奉行。主水正と称す
- ・ 同 年十一・七、家督を嗣ぐ
- ・ 元治元子・二・九、（於京都）任大目付
- ・ 同 年六・二十三、宗門改役
- ・ 慶応元丑・五・六、辞職、寄合
- ・ 同 年十・四、大目付、外国奉行兼帯再役
- ・ 慶応三卯・二・晦、（京都にて）若年寄格（高千石に、勤役六千石加え、七千石）
- ・ 同 年十二・十五、（本役）若年寄
- ・ 慶応四辰・二・九、御役御免、寄合

・同 年二・十九、逼塞を命ぜらる。

一、文久二年十月六日

(斜封紙)

「伊 遠江守様

永井玄蕃頭

肅復

(端裏書)

「敬復閣下

尚志拜」

書類は御器中江入置申候、以上

瑤章捧読仕候、如來俞、小春之候、益御勇健被成御坐、奉敬賀候、陳者、英猷遊艦御見物、來春ニ被成候由、幸右御船、先達而夜中之烈風ニ而、千五百石積程之商船流來、其為損所出来、御繕被遊候間、御見物相延候方、別而都合宜御坐候、西洋大小船舶附御入用之由、則差上申候、御見合ニも相成候ハ、抔欣此事ニ御坐候

先日者、兼而所持罷在候六響砲、岩瀬より、経雷覽候処、御蔵筒ニ可被成候段、同人より承、難有、六響砲も亦、其所を得候哉、欣躍可仕と奉存候

乍末、御国産之珍鱸御恵投被下、難有奉拝受候

西洋ニ而は、近來鐵製大ニ開候趣、御当国ニ而は、製鉄法何分備兼候、御領国坏ニは、定而良鐵出産之山坑も可有之歟、幸、崎陽より差越候「製鉄畧記」^④有之候間、進呈仕候、此外之類は、皆、岩瀬より差出候と、同様之物耳ニ御坐候、頓首敬答

十月六日

再伸、即時三杯を過、乱筆御海涵被下候様奉願候、乍末毫、先日ハ宮中おゐて、令 嫡公江も拝謁仕、難有奉存候、

伊達宗城とその周辺(続) — 河内

以上

① 英献遊艦Ⅱ 具体的には未詳

② 西洋大小船舶附Ⅱ 伊達宗城の「在京日記」に記事がある（次番Ⅱ、註②）

③ 六響砲Ⅱ 前号、岩瀬との書翰など関連

④ 「製鉄略記」Ⅱ 未詳

内容 一、英国献上軍艦見学は、夜中商船と衝突、損傷のため、来年春とす

一、西洋大小船舶価格表

一、六響砲、岩瀬を通じて渡す

一、国産の鰯（ぼら）の礼

一、西洋製鉄の知識、「製鉄略記」を進呈

一、貴家嫡公（宇和島藩主 伊達宗徳）に会う。（宗徳はその年十月五日、江戸を発し帰国の途次）

二、文久二年十二月二十二日

（封筒）

「伊 伊豫守様

永井主水正

敬鴻

「（封筒裏面に「八吉夕涼」とあり）」

不計、尊諭被成下、難有、忙手、捧読仕候、如來命、餘塞尚峭料候得共、先以、益御勇健被成御坐、奉敬賀候、然者、
当今 公武御大變革、真ニ御合體之御時節到来、誠以恐悅至極、上下同心精勵尽力此時と奉存候

拟今般者被為蒙 御内勅、御上京、殊ニ速ニ御上京被為在候段、被遊御満足、暫御滞在可被為在、被為蒙 特命、

重疊、為國家奉敬欣候、右ニ付、御旅宿之儀ニ付被 仰下候趣、委曲謹諾、早速同寮へも申談候処、異論も無之、何

レ者差繰可申候間、是迄御旅宿相成居候三ヶ寺、何月迄御宿館ニ相成候共、差支無之候間、左様思召可被下候、

尤、御上洛ニ付而者、多分之旅宿御入用ニ相成、且者、是迄追々上京罷在候諸藩侯、手早被借請候向も有之、品々困却之次第も御坐候間、右三ヶ寺之儀、若表立被仰達候而者、自他之響ニも相成、却而當惑致候間、何れ江も御沙汰なしニ、其儘三寺へ御寄宿被為在候様、奉願候、同僚共彼是談判ニ而奉復、遅刻相成申候、御海恕奉願候也、謹答再拝

臘月廿二

再伸、時下、為國家御保護奉祈候、如仰、外夷御処置儀は、実ニ不容易御儀、拙輩も再御引上ニ相成候段、誠以難有、乍不存消滴、微忠相尽候心得二者奉存候得共、庸愚短才、只尸素之恐、獨歎息罷居候段ニ御坐候、何分、親外藩侯御同心戮力、至當不御良謀所懇望御坐候、頓首

〔奥封〕
緘

伊豫守様

尚志

拝答

① 公武合体ニ十月二十八日、勅使三条実美・姉小路公知着府、十一月二十七日江戸城で將軍家茂に攘夷の勅書を与う。十二月七日江戸発、帰京。

② 宗城の上京ニ十一月三日、帰国途次の伊達宗徳に、京都で、宗城の宇和島からの入京の内勅を与える。宗城は十二月十八日着京する。

このときの宗城の上京については、宗城自身による「日誌」がある。文久二年から慶応四年二月までの七冊を収めて公刊されているのが、『伊達宗城在京日記』（史籍協会叢書）である。何れも、宇和島伊達家文書の中に、自筆本（横半帳）が遺る。ここに関係するものは（以下「在京日記」とする）

(1) 「奉蒙御内勅上京始末密誌」（文久二・九・二十、文久三・二・十四）

伊達宗城とその周辺（続）——河内

(2) 「依御内勅在京日誌」(文久三・二・十五、同五・二)

③ 京の旅宿三ヶ寺——十二月十五日大坂着のとき、京から、町奉行の世話で、宿舎三か寺を紹介する旨の連絡を受けた。」「在京日記」(1)

寺町四条下ルの三か寺で、本陣が浄光寺、下陣が透玄寺と聖光寺

内容 一、公武合体の機到来

一、將軍上洛の決定。先発として京都守護職松平容保十二月二十四日着京。將軍後見職一橋慶喜は翌三年五月五日着京する。

一、宗城在京中の宿舎の件

一、宗城入京への期待。親藩外様同心としての協力体制を懇望。

三、文久三年正月二十三日

(封筒)
「伊 伊豫守様

永井主水正

執事奉復

.....

└

昨日者尊書被成下候処、夜ニ入帰宅、捧読仕候、如來俞、膏雨、暖和之候相成申候、益御清穆被為在 御起居、奉敬賀候、然ハ、旧獵御宿寺之儀ニ付被 仰下候趣、御都合相成候段、御丁寧被 仰下、奉恐縮候、

扱、近日來、 朝廷諸卿も御混雜之御様子之由、野生聲只伝承耳ニ而、御實際之處深心得不申候、只痛心苦悶罷在候、当節者、一橋公も御上京、旁旧獵も申上候通、 尊公其他御上京之大小侯伯、御戮力、 朝威 幕権御挽回、金毘泰山之鎮安、御周旋所翹望御坐候、橋公御宿寺へも、折々罷出、御物語も同、御氣力も宜敷、丹誠御勉励、難有奉存候、被仰下候、昨今滞京之大小侯伯宿所、別冊差上申候

御礼跡ニ相成申候、御国産之佳品御惠贈、奉萬謝、貯置、拝喫仕候、御上京後拝趨相窺可申共存居候得共、如來命、何歟嫌疑も無ニしもあらすと、差扣罷在候、如仰、其節、橋公御宿寺へ御出之節、邂逅、御目通仕候儀も可有之、希居候、頓首再行

首春念三

再伸、為国家、御自重被為在候様、乍憚奉祈念候、仰之通、宿寺門へ張紙、何者之所業ニ候哉、密探罷在候得共、于今証跡探当り無之、三条橋高札ニ有之候小生名前も、先夜被削取申候、是も何者やら相分不申候、兎二角、諸士横行、恐入候事御坐候

○下曾根甲斐守上京之頃合者、図書頭殿附属之吏官へ承合候処、未遲速相分不申と之事御坐候

○西洋海陸戦図其外、洋画所持も候ハ、可入御覧旨被 仰下、先年ハ所持罷在候所、蒙嚴譴候節、不殘売却、活計之一助ニ致、當時は更ニ無御坐候、以上

副 啓

今朝者、御家臣被遣、御近況奉審知、敬賀、御家臣より申し談候儀、取調相分候ハ、早速可申上候、其他、当職相応之御用も被為在候ハ、無御慮慮可被仰下候、以上

(奥封ウツ書)

「伊豫守様

尚志」

① 永井との交信「在京日記」(2)に正月二十二日宗城より永井へ、二十三日永井より「返事参」とある。

② 張紙「伊達宗城宿舎への張紙あり。」「在京日記」(2)

文久三年正月十日条に

「今朝門に落札有之由、目付よりミセ候事、(此所、原本六七行空白)」とある。

伊達宗城とその周辺(統) — 河内

以下、御所内等各所での落札、張紙の記事あり。

③ 下曽根甲斐守＝講武所砲術師範下曽根金三郎信之

④ 図書頭＝当時外国奉行竹本図書頭正雅か

内容 一、一橋慶喜(將軍後見職)の上洛、正月五日着京。宿舎東本願寺。

一、在京諸侯の宿舎

一、国産品恵贈への礼

一、宿舎寺門への張紙の件

一、下曽根金三郎入京の件

一、「西洋海陸戦図」その他の西洋画、先に免職の際、処分して無し。

四、文久三年三月十一日

(包紙)

伊達伊豫守殿

二条御城

永井主水正

有馬遠江守殿御渡候別紙御書付写巻通、為持御達仕候、以上^①

三月十一日

永井主水正

伊達伊豫守様

猶以、御使ニ付、殿文字相用候、以上

(別紙)

(端裏書)

「大目付江

覚

嶋津大隅守 ②

伊達伊豫守 ③

長岡鑑之助 ④

長岡良之助 ⑤

右、明十二日九時頃より、二条御城江罷出候様、可相達候事

但、鑑之助・良之助儀者、御用相済候上、御所当番罷出候様、可相達候事

三月十一日

① 有馬遠江守 若年寄有馬道純（越前丸岡藩主、のち文久三・七・五老中）

② 島津大隅守 島津久光、薩摩藩主忠義父、三月十四日に入京

③ 伊達伊豫守 前宇和島藩主伊達宗城、十一日孝明天皇賀茂上下社行幸に供奉

④ 長岡鑑之助 澄之助、のち熊本藩主細川護久

⑤ 長岡良之助 長岡護美、熊本藩主細川慶順（のち詔邦）弟

内容 一、若年寄有馬より、島津久光・伊達宗城ら四名へ、三月十二日二条城出頭令

五、文久三年十一月二十六日（写）

（端裏書）

十一月廿六日

乍先敬、以略紙奉呈一書候、然者、二十一日夕京地発足、淀川夜船ニ而、廿二日曉大坂江着岸仕候処、同日者、前夜

伊達宗城とその周辺（続） — 河内

より浪華市街出火^① 全ク過火ニ而
 怪火ニハ無之^② 之処、西風烈敷、意外之大火ニ相成、着坂比ハ盛ニ燃上り候得共、浪華城ハ風脇ニ相成

居候故、同処奉行江申談之上、直ニ御城入仕、橋公江も拝謁仕、被仰含候趣半バ申述候と、橋公も御諒察、いつれニも今般之処ハ、速ニ御上落不被為在候而ハ相成間敷、東下致候ハ、此方之口上をも相加へ、可成丈早々御上落之

儀御勸可申上、尤此段ハ閣老江も文通致度候得共、漸昨日着坂甚混雜中、殊ニ其方江茂、委細申含候間、別段文通ハ不致間、閣老衆江も懇に可申述之御沙汰候間、兼而被仰含之趣者、猶委細橋公江も申上、差詰、橋公御上京之御日合、切迫ニ御詰問申上候処、廿四日ニ上京と治定致候段御沙汰ニ候間、已ニ御治定之上ハ、必廿四日二者御上京可被成段、念を押申上置候間、定而同日二者御上京相濟候儀と被存候

橋公御着坂、御入城御延日之儀も相伺候処、是者実ニ不得止事情ニ而、已ニ、今般私も大坂港より、御軍艦江乗込候積之処、風波荒く、不能其儀、陸路兵庫へ罷越、乗艦仕候次第、橋公之兵庫へ御廻りも、同日之論ニ有之段ハ、御相違も無之、是等之云々ハ、手代木直右衛門江篤と申聞置候間、同人より委細申上候儀と奉存候、扱、私儀、兵庫へ罷越、廿三日夜半ニ御軍艦江乗込、子ノ刻過、彼是丑刻比、兵庫港出帆ニて、夜海上を走候処、甚烈之追風ニ而、至極宜敷、風烈敷故、艦之動揺は甚敷候得共、廿六日丑刻過敷、寅刻と覚候時分、品川沖へ着艦仕候間、一旦一寸煙毛、入湯仕、直登宮と存候処、炎上後ハ清水館江移御之処、右廿六日二者、上様、和宮様、田安館へ御移之儀被仰出候趣ニ付、彼是承合、先ツ一旦清水館へ罷出候処、只今ニ田安館へ移御被相成候と申出、御混雜中二者御坐候得共、御用部屋へ罷出候処、雅楽殿、和泉殿、備前殿、^③若年寄兩人居候間、被仰含候趣逐一申述、私存意之趣申上候ケ条も、懸御目候処、雅楽殿、和泉殿二者、此度者、是非御上落不被為成候而ハ不相成との、兼々之御見込之由ニ而、今般私江被

含、東下被仰付候儀、至極御敷ニ御坐候而、私より申上候義、一々御領承、外閣老衆は、最早田安館へ御出ニ相成居候間、移御後、田安館へ罷出可申と之儀ニ付、移御後、罷出候処、直ニ召出し御前被仰付、大和殿、周防

殿、河内殿、遠江殿、^④

御前側ニ御列居ニ而、今般東上仕候趣意言上可仕と之義ニ付、兼而之仰ハ勿論、私心附事共
不残吐露仕候処、かく迄之次第ニ而ハ、是上必 上洛不致候而ハ不相成候間、愈 上洛可致段、今日直ニ触達可致
と之 上意ニ而、実以難有、感涙之外無之、大和殿初、防州其外口氣をも考候処、 上様と閣老衆之処ハ、是非共

御上洛可相成と之、是迄之御決意と被察候、只、諸有司之紛々之論ニ、御困之御様子ニ而、 御前ニ而も、防州

今少々其口氣有之候間、

上様と閣老衆ニ而御決ニ相成候義を、諸有司之論之為に變動有之候而者、此上ハ所詮私之
力ニ不及と存候間、私儀、今度東下被命義ニ付而ハ、三日中ニハ御決断を相伺、帰京致候心得ニ而、出京仕候得共、少々
猶豫を取、五日之間ニ御決定御伺候決心、萬一諸役人之異論を説得致可申杯、御沙汰有之候共、是等之儀ハ、只今

御前ニ而已ニ御決定ニ相成候を、諸有司彼是可申様無之、異論相立候者有之候ハ、閣老衆より、嚴然御説解可有之段
申上候処、鄙意之処、 上様ニ而御了解ニ而、此上諸有司異論いたし候者有之候ハ、嚴々説解可致と、即ニ閣老へ

被命、真ニ難有事ニ御坐候、

扱、御期限之処も、直ニ御沙汰有之候所、來月中旬と被仰出度候得共、炎上一条ニ付而者、いかに御構無之と申候而も、
何分中旬と之御沙汰ニ者相成兼候御様子に而、爰所ニ而無理ニ中旬と被仰出候而、下旬ニ相成候様ニ而者、実ニ御不本
意ニ被 思召候間、下旬と被 仰出御内実ハ、可成丈中旬之 思召ニ而、夫々御手筈可有之段、 御前ニ而、閣老衆御

沙汰ニ御坐候、今日之 御前ニ而、大綱者御治定ニ相成候間、明日も当所出立と存候得共、 御前を引候後、猶又

防州公被仰候ニハ、明日も登 宮可致、諸有司異論致候者ハ、此方共より嚴ニ沙汰可致ハ勿論ニ候得共、猶私よりも、
京地之事情、諸有司へ可申聞と之仰ニ付、今四五日は滞在仕、諸有司之様子をも見拔、微力之及候丈者、説得仕候心得
に御坐候、

扱、其諸有司之論と申候者、閣老衆より大要伺候処、当春之覆轍を踏候論も有之、是者実ニ皮膚之見辦論と申程ニ不及、

一言ニ而、必説破致候、今一端ハ、今般御上洛被為成候ハ、公武御一和論より、攘夷者御沙汰止ニ而、開國論ニ可相成と之儀ニ而、盛ニ異論を申唱候由是ハ過激家之論、諸有司之肺肝ニ先入致居候故ナラン故、攘夷之私之辦解を不待、有志之者ハ誰も心得居可申事坏と申、不請付、つまり一日も早く御上洛被為成候様之外、他会無之候、

閣老よりも御返書可被進得共、私よりも事実可申上様、閣老も申含候間、此段申上候、委敷可申上と存、徒ニ長文ニ相成候計ニ而、意味合迄ハ紙上に難尽、つまり候処、上様之御断と、御真意者只々恐入候外無之候、猶此後申上候儀も可有之候得共、今日登宮後之御模様申上候、呉々御上洛來月下旬と被仰出候而者、遅延之様可被思召候得共、何分中旬ニハ、実ニ御六ヶ敷御様子、併今日之御決断之処ニ而者、此儀ニ付而者、必御因循ハ有之間敷奉存候、前文之儀、略紙、乱書を以申上候段、誠ニ奉恐入候、御宥恕奉願上候、以上

十一月廿六日子刻

永井主水正

上

- ① 浪華大火 文久三年十一月二十一日、大坂新町橋詰より出火、一四〇余町、一万四五〇〇戸余を焼き、二十五日鎮火。將軍後見職一橋慶喜は、二十日海路兵庫着。その日、大坂へ入る。
- ② 江戸城炎上 其れより先、十一月十五日、江戸城出火、本丸・二の丸とも焼失。將軍及び夫人親子内親王（和宮）は、吹上苑へ避難、十七日清水邸へ、さらに二十六日田安邸へ移る。
- ③ 雅楽殿 老中酒井忠績（姫路藩主、文久三・六・十八任）
和泉殿 老中水野忠精（山形藩主、文久二・三・十五任）
備前殿 老中牧野忠恭（長岡藩主、文久三・九・十三任）
- ④ 大和殿 前老中久世広周（関宿藩主、文久二・六・二辞）

周防殿Ⅱ老中板倉勝靜（備中松山藩主、文久二・三・一任）

河内殿Ⅱ老中井上正直（浜松藩主、文久二・十・九任）

遠江殿Ⅱ老中有馬道純（丸岡藩主、文久三・七・五任）

内容（江戸へ帰着の永井より、京の宗城へ）

一、永井、十一月二十二日大坂着、前夜よりの大坂大火に遇う。

一、大坂城で一橋慶喜に会う。將軍上洛について打合せ

一、永井は、陸路兵庫へ出、二十三日深夜同港出帆、海路江戸へ帰り、二十六日登城。將軍の田安邸への移転混雑中の

清水邸へ赴く。

一、さらに田安邸へ赴き、將軍及び列座老中等に会う。將軍上洛延期問題を協議

一、將軍上洛は五日以内に可否を決定せん

六、文久三年十二月二日（写）

（端裏書）

「大樹上洛之件

十二月二日

永井主水正

「

一筆奉呈上候、甚寒之節御坐候得共、益御勇健被成御坐、恐悦奉存候、

然者、去廿六日着船、登城召出有之候、被仰含之条々、言上、閣老衆江も可申上候段者、先便申上候通之次

第二御坐候、其後猶諸有司江も、貴地之形勢、処々演説、何れも急々御上洛無之候而ハ不相成段、懇々説得、少々ツ、

ハ彼是之議論も有之候得共、談判も相合、猶五六日間、諸有司之様子をも伺居候処、最早差而之異議も無之、殊ニ

上様は勿論、閣老衆も断然御据相成居候故、此上御動者無之存候得共、昨日猶御発艦御日取をも伺候処、十八、十九、

廿一、此三日内之思召、御内治定之由、防州公御沙汰御坐候間、右御治定之上ハ、此上たとひ諸有司異論有之候共、動有

之間敷故、至急ニ相伺候処、最早断然御据相成候故、決而御動者無之段被仰聞、右之御据りを伺候上ハ、私儀、一日も早く出帆致候方可然奉存候間、御軍艦方江及掛合候処、当月五六日比、御船都合宜敷趣申聞候間、右兩日之内ニ出帆と、治定仕候、委細之儀ハ、帰京之上可申上候得共、此上ハ、最早御動無之と見据候間、不取敢此段奉申上度、捧一書候、謹白

十二月二日

永井主水正

上

① 廿六日着船云々前番書状にくわしい

内容 一、前便に続いて、江戸での將軍上洛問題の状況を報ず

一、長州問題治定（文久三・八・十八政変後の対長州強硬処分論）のためにも、上京の要。船が都合よし。

七、元治元年十一月二十五日

（斜封紙）

「伊 伊豫守様

永井主水正

執事

—

一輪相呈仕候、向寒之砌、益御清穀被為涉、奉敬賀候、然者、此節御家臣松根図書、蒙 命、出藝、小拙宿陣江も罷越、不相菱御懇切被 仰下、深志奉感謝候、今般征長御出勢之儀ニ付而者、千萬御配慮被為在候段、図書より委曲承、為国
家御赤誠懇到、感称申上候迄も無之候、小拙も、不計淀閣老之差添之蒙 台命、不顧浅陋、御請申上、過日藝着、只々尾惣督之驥尾ニ付、聊、責を塞居候耳、乍不及、恐懼尽力罷在候、

扱、先頃中、前御家臣登坂之節者、兼而願置候杜甫出塞曲御揮毫被成下、征長御用出陣前と申候、別而難有奉存候、容堂公へも御同様願置候処、いまた出来不致、圖書ニ承候得者、同家江者折々御書通も被為在候よし、御序之刻、尊公より御催促被成下候様、奉願候、且又、春山老公御書之精妙、兼々承及候処、圖書御用済ニ而、一兩日中帰国之由承候間、差附相願候者恐入候得共、同人江龜絹相託差出候間、御序之節、御随意御揮灑被成下候様仕度、尊公より可然被仰上可被下候、

扱、一夕風と御家臣一羽を携訪、過幸、此一兩日者、小間を得候間、対酌不計雅興ニ入申候、帰国後、定而委曲御家臣より可申上、御家臣醉画之人物、殊ニ妙絶ニ候、征長之儀ニ付、相応之御用被為在候ハ、可被仰下、是迄之動靜者、御家臣へ談話仕置候間、右ニ而御承知可被下候、頓首百拝

仲冬念五

永井尚志

宇和嶋老侯

閣下

再伸、時下、為國家御保護被為在候様、專要奉存候、以上

① 松根圖書〓宇和島藩家老。桜田二家、穴戸・神尾に次ぐ第二クラス。

② 出芸〓長州出兵（元治元・七・十八〜十九禁門の変、七・二十三朝廷の征長令、八・十七幕府徳川慶勝を征長総督に任命十一・十一長州藩「降伏」）。永井は、副総督松平茂昭に従って京都から大坂（十・十八着陣）に移る。茂昭は十一月二日、海路九州へ向い、十一日小倉に着す。永井は広島島の征長督府にとどまる。

③ 淀閣老〓老中稲葉長門守正邦（山城淀藩主）（元治元・四・十一任）

内容 一、宇和島藩の長征出兵に謝意（伊達宗城・宗徳の使者〓等覺寺清崖・大隆寺晦巖ら〓による徳山藩主毛利元蕃への恭順勧告も含まれるか）

一、杜甫出塞曲揮毫の礼。容堂へも頼みたし。
 一、松根図書との広島での接触。

八、元治元年十二月三日

〔斜封紙〕

（異筆） 臘十三達

伊 伊豫守様

永井主水正

敬復御直披

御家臣桜田大助を以、御投示之尊書、去月念八相達、奉敬読候、逐日寒威相募候得共、先以、台候益御壯健被為渡、奉恭賀候、然者、小拙今度再勤、且当地于役之蒙 仰候段、御承知被 仰下候趣、千萬鳴謝、乍去、兼而御熟知之通、庸愚無似、難堪重任、日夜焦慮之外無之、心裡共亮察可被下候、

扱、長人より応答之大意、且問訊之件々も、不苦儀者申上候忤謹承、去月廿日、穴戸備後助呼出、承紕候処、大意、大膳父子者勿論、役方之者其他、士民ニ至候迄、恭順、謹而御沙汰奉待候段者、相違も無之候得共、畢竟、闔国疑心団結、種々申唱へ、又者、公然、役筋へ申立候ものも有之、何分説諭而已ニ而者、氷解いたし兼候二者、痛心罷在候趣、其後、木梨彦右衛門并奇兵隊之者も出藝致候付、晦日ニ呼出、承候処、太意同様之申立、一通り事情尤共愚考仕候間、猶書取を以可申立旨相達、問訊之ケ条も書取、藝藩を以相達候程之儀ニ付、密々致候儀二者無之故、問訊ケ条廉々も申上候而も、聊不苦候得共、御内示なから、当役柄、小拙より直ニ申上候儀者、何分いたし兼候間、此処者御賢察可被下候、將又、当時者、弥 公辺より御疑被為蒙候趣之由、御來書之趣、其御意味合之程者心得不申候得共、小拙再勤、且今般之蒙 御用候付而者、種々愚意建言仕候儀も有之候得共、於 尊家、 公辺より当節御疑被為蒙候様之御模様

者、更々承知不仕、御來書ニより愚考仕候得者、去頃長州家老より小倉藩江贈候書中ニ、宇和島云々之文有之、是等之行違より、右様賢考御配意も可被為在哉共存候得共、愚考ニ而者、右等之儀ニ而、公辺ニ而決而御疑念者可被為

在共不被存候、夫ニ付、愚衷申上候、

畢竟、長防紛々之一件も、当節柄種々巷言異説真偽を混し、公辺御趣意者、長防江不徹、長防情実ハ不上達より、

狐疑之極者、所謂張狐戴鬼ニも至り不申歟と存候、古今之動乱も、其根元者、多くハ情実不通、疑心難解より起り可申歟、一旦之狐疑、国家之大事ニも至り候者、実ニ慨歎之至、此際尤杞憂仕候、就而者、今般之御用之愚意ハ、赤心を披、長人へ問訊、真偽分明、狐疑氷解、上下之情実貫徹いたし候ハ、其上至当之御処置も可被為附哉奉存候外、他念無之候得共、長防之形勢、当春以來、又一変、諸隊之者国是を執、議論を主張いたし、徳山・岩国等者、束手閉吻、窃ニ憂慮致居候哉ニも承及居申候、是等之實際、公ニ者定而分明、御承知も可被為在、国家之為、何卒御内談偏ニ奉懇請候、今般之御用、実ニ焦心苦慮、御憐察可被下候、誠惶謹復

臘月三日

永井主水正

宇和島老賢公

閣下

再白、時下、御保裔可被為在、專要奉存候、乍末筆、乾鱸子御惠贈、敬謝、日々拝喫仕候、以上

① 桜田大助ニ宇和島藩士桜田久左衛門子、二四五石、小姓、宗城付

内容 一、桜田よりの来信を謝す

一、長州藩「恭順」の実情報告

伊達宗城とその周辺（続）——河内

一、木梨彦右衛門や奇兵隊の動き
一、宇和島藩の果した役割を評価

九、元治元年十二月十八日

(斜封紙)
「伊 伊豫守様

永井主水正

執事

本月二日之尊翰、同月望前相達、洗手拝読仕候、如命、逐日寒威相募候得共、益御勇健被成御坐候段、近況審知、奉敬賀候、

扱、先頃御家臣図書出藝、訪來之節、督府之御処置見聞罷在候、廉々大略物語候処、御参考御一助ニも相成候趣、縷々被仰下、御懇念之至奉存候、其後さして相変候儀も無之、大膳父子、追々陳謝伏罪之情実申立候付、山口より萩邊之動靜、実境為見糺、去十四日、督府より石河佐渡、監察戸川鉦三郎差添出立、今日頃山口着之御積、実境之形勢、愈陳謝之情実相違無之候得者、右を段落ニ而、後図之御処置可有之、惣督公之御意内と、敬察仕候、督府ニ而者、種々前後御勘合ニて、此節まで之御運ニ相成、大慶奉存候得共、督議持重ニ被過候哉ニも被察候、如來示、長防事件御卒業相成候ハ、外夷之御処置、天下一定之御決議相立候様、窃希居候、道中筋水人之動擾も有之、旁此上多日を不費、長防之事件達成所祈御坐候、御国産之綾布手綱御恵投、当節柄別而難有、重寶仕候、且西崎より御入手之由、管城子近來珍敷、精品萬謝、愛用仕候、被仰越之枝柿、甚々微少拝呈、後便猶進呈可仕候、恭敬頓首

極月十八日

主水正

宇和島老候

閣下敬復

再伸、時下御保衛專要奉存候、諸將見込建白、秘写御廻し申上候杯被仰下候處、右者全惣督御手元限之由ニ而、小生輩も未一見不仕候間、委細承知不仕候得者、多分者条理判然、天幕御威徳相立候様と之大趣意ニ而、御処置振等ニ至候而者、仰公裁候と申候迄哉ニ窃ニ承居候、此後御下ケニも相成候ハ、秘写御廻可申候、督府江之御一封者、即差出申候、以上

三伸 御家臣図書へ、御序之節、可然鶴声奉願候、以上

おもひきや 小手に たわしる

寒さをは

しらて 今宵の 霰 聞とは

一笑萬幸

① 石河佐渡Ⅱ石河光晃

戸川鉾三郎Ⅱ目付戸川安愛、ともに征長総督の参謀役

ともに、征長総督の名代として、十二月十四日広島を発し、廿日市・玖海・徳山・宮市等を経て、十九日、山口に入る。

② 水人之動擾Ⅱ水戸天狗党の挙兵（三・二十六）、領内交戦、西上、降伏（十二・二十）

内容 一、征長軍の状況につき情報交換

一、総督府より、山口への使者石河・戸川

一、水戸の動乱もあり、長防事件も早期解決を望む

一、綾布手綱、管城子（筆）の礼。枝柿を贈る。

一、征長軍諸將の建白書呈覽の件

一〇、(参考) 慶応四(明治元)年正月七日 戸田大和守宛(写)(別紙とも)

(斜封紙)
封

後筆(朱書)「明元大阪退去之報」

戸田大和守様

永井玄蕃頭

此度之事変、追々切迫之形勢ニ押移り候ニ付、別紙之通

御奏聞被遊、今七日早朝、大坂御城 出御、御軍艦ニ而、御東帰被遊候、且又、御城者、尾張大納言殿・松平大蔵大輔江御預ケ相成、役々も御軍艦ニ而罷帰、地役之面々者、兵庫表江罷越候様申渡候、此段為御心得、申進候、以上

正月七日

永井玄蕃頭

戸田大和守様^①

(別紙)

(端裏書)
「写」

此度上京 先供途中、偶然之行違より、近畿騒然ニ及候段者、不得已之場合ニ而、素より奉対 天朝、他心等無之段者、兼而 御深知有之通ニ候、併、聊たりとも、奉悩 震襟候段、深恐入候儀ニ付、浪華城者尾張大納言・松平大蔵大輔江相托し、謹而東退仕候、以上

正月

慶喜

① 戸田大和守Ⅱ戸田忠至、宇都宮戸田家一族の間瀬家を継ぎ間瀬和三郎。文久二・十・二十二山陵奉行任、畿内山陵の修補等にあたる。禁裡附を兼務、慶応三・七・五若年寄となる。

慶応二・三・二十、宇都宮藩からの分知により、一万二一三九石の下野国高徳藩主となる。

② 尾張大納言||前尾張藩主徳川慶勝（慶恕）

松平大蔵大輔||前越前藩主松平慶永

内容 一、慶応四年正月七日、大坂城から江戸へ帰る、前將軍慶喜（正月六日、大坂城を出る）の始末報告

一、慶喜の申立て書写添付

一一、明治二十二年七月一日

（封筒）

「京橋区木挽町一丁目

伊達 宗城 殿

拝答侍史御中

（切手消印、受信局消印 東京二・七・一、本所）

寺嶋邸二百五十五番地

「不足二銭」の押印あり

永井尚志「」

芳翰捧読、其後ハ久敷御起居相伺不申、背本懐候、如來示、兎角不順之候御坐候得共、先以、益御健康被為在、大慶奉
存候、然ハ、此程、維新前後之事御取調被成候付、文久初年之頃、旧幕府内之実況、勅旨遵奉賛不賛之重ナル人々、
並ニ議旨之儀共、老拙心覺居候廉、又者手録等有之候ハ、申上候様御來翰之趣、謹承仕候、文久初年之頃、旧幕府に
て心配仕候者、攘夷之一大事件にて、其頃廉々手留致置候へ共、慶応末年ニ西京へ差置、悉皆烏有と相成申候、右之攘
夷事件者、固より嚴敷勅旨故、遵奉可仕者勿論ニ御坐候間、幕臣中、誰とても不ノ字ヲ公然口外致候者ハ無御坐候へ共、
何分速ニ実行致かたく、皆々只管心痛苦慮致候のみにて、誰々者賛不賛と申候差別も無之と愚考仕候、

慶応末年政權返上之儀に付而者、慶喜君之独断にて、関東之幕臣等八種々議論も致候上、追々上京致候者も有之候得共、慶喜君一々二面会、説諭被致、何レも納得致候事にて、其意共申立之旨趣、并説諭被致候主意等者、睨と承及申候、大略前文之次第にて、御参考にも相成間敷存候へ共、貴答迄ニ右申上候也、頓首

七月一日

尚志

再拝

宗城公

侍史

- ① 京橋木挽町 紀伊国橋の東の木挽町一丁目は、宇和島支藩の吉田藩邸で、最後の同藩主伊達若狭守宗敬の邸
 ② 寺嶋邸 隅田川（大川）中流東、向島、南葛飾郡寺島村、現墨田区東向島。

内容 一、維新前後の景況、旧幕府内の状況等を語り合う。
 一、慶喜の大政奉還についての関東幕臣の不満を回想

一二、明治二十一年七月七日

（封筒）

「京橋区木挽町壱丁目

伊達 宗城 殿

執事御中

寺嶋邸二百五十五番地

永井尚志

(切手消印、外に、東京二・七・七 本所)

此程者、茅屋御訪下被下、久々ニ而緩々拝顔、御難有奉存候、時節柄、兎角雨天勝御坐候得共、益御清栄、被為在御起居、大慶奉存候、然者、尊來之節御談話之条々、御確答出来兼候段、汗顔之至御坐候、尤老拙在役中、諸事取扱候旧幕臣之内、尽力致候者共之姓名等可申上旨、仰之条者、老拙心得居候丈者、別紙之通ニ御坐候、尤一己之私評ニ而、不適当之所も可有之、此段者御宥恕可被下候、何れ御左右伺として、参館可仕候得共、乍略儀、紙上ヲ以、右申上候也

七月七日

永井尚志

再拝

伊達宗城様

侍史

(別紙、豎綴、表紙なし)

大目付 土岐丹波守

学力ハ薄く、才略も無之候得共、誠実正直之人物ニ而、国事多端之折尽力、心胆者純一不変者ニ候

町奉行 跡部甲斐守

性來活発、職事上尋常、小事者事を事とせざる如く、廉立候事ニ当り者、決断有之

目付 戸川中務少輔

目付役之首坐ニ居、性質正直ニ而、人才登庸を重んじ、目付役ニ者適當之人物、中年ニ而死去致候て、可惜事也

目付 鵜殿民部少輔

前書戸川ニ継ぎ、目付役之首坐ニ居、性來活発ニ而、小事に区々たらず、是又人材登庸を重んじ、職掌を辱しめず、多

事の折、海防事件を総て担任す

外国奉行 堀 織部正

性來剛正にて、才は乏敷方ニ候得共、学識あり、胆力あり、職事に臨みて、自己の利害を顧みず、目付勤役中、造船其他、海防事務に任し、外国奉行勤役中、各国条約締結之委任を受く

外国奉行 岩瀬肥後守

学識あり、才力あり、明敏にして、事に当りて遅緩ならず、勇往撓まず、一身の利害を顧みず、目付勤役中、砲台建築、大砲鑄造、其他海防事務に任し、外国奉行ニ転し、各国条約締結の委任を受く

浦賀奉行 井戸石見守

目付より浦賀奉行ニ転し、学識あり、人才を愛し、純正にして、稍才氣あり、只決断之乏敷は、其短なる所也

儒者頭 林 式部少輔

学識あるは勿論なれ共、才は乏敷方、人才の教育、且登庸を重んじ、家学の門地を墜さず、純正之者也

若年寄 遠藤但馬守

職務に勉励怠たらず、性來達才には無之候共、多年職務に服し、事務に練達し、多事之時節、事務多忙なれ共、其処分を終らされは、苟しくも休さる者也

小性組番頭 土岐豊前守

局量狹隘なれ共、性來方正にして、人才を愛し、自分の組下ハ勿論、他組の者と雖も、有用の人物と認め者、登庸、拔躍して、番頭之職に適任の者なりし

外国奉行 水野筑後守

局量寛からず、自己の見込を固執するの癖あれ共、職務に当て、苟しくも曲從する事なく、且、才学共ニ稍々有之、各
国条約締結之委任を受く

勘定奉行 川路左衛門尉

学あり、才あり、且世に應するの巧みなる故、或は奸猾者の人言あれ共、国家に尽すの心胆ハ、純然、奸物に者無之
老拙勤役中の同僚、又ハ親敷接し候者之内、前書之者共、性質は名実同有之候得共、国に尽すの心胆ハ、何れも同一
にて、其頃之役人中、錚々の輩と存候、尤老拙一己の人物略許にて、履歴に至りてハ、委細に心得不申候

内容 一、宗城、寺島村に永井を訪ね、歓談。この年、宗城は七十一歳、永井は七十三歳。宗城は四年後の明治二十五年十二月十

七日、七十五歳で没。永井はその一年前に没)

一、旧幕臣仲間、一二名の人物評

土岐丹波守頼旨(安政五、六年の役職) 大目付、海防掛

跡部甲斐守良弼(同) 町奉行から清水家附へ

戸川中務少輔安鎮(目付は文久三・六・八から

鶴殿民部少輔長銳(安政五、六) 目付から駿府町奉行へ

堀織部正利熙(同) 箱館奉行から外国奉行

岩瀬肥後守忠震(同) 目付から外国奉行

井戸石見守弘道(同) 町奉行から大目付へ、安政五・四・七没

林式部少輔輝(同) 大学頭、儒者、米使応接

遠藤但馬守胤城Ⅱ（安政五、六）若年寄

土岐豊前守朝昌Ⅱ（同）浦賀奉行から書院番頭へ、さらに講武所奉行などを経て側衆

水野筑後守忠徳Ⅱ（同）田安家家老から外国奉行、そして軍艦奉行へ

川路左衛門尉聖謨Ⅱ（同）勘定奉行から西丸留守居へ、その間、ロシア使応接

八、伊達宗城宛、戸田氏栄書翰

次に、幕臣の一人として、戸田伊豆氏栄のもの（一点のみ）を示す。

五千石の旗本戸田氏栄（うじよし、一七九一—一八五八）は、大垣藩主戸田家の一族、寛政十一年生。天保末年からすでに幕政に参画、徒頭・使番・駿府町奉行・日光奉行・下田奉行を歴任、弘化元年二月から浦賀奉行を勤め、嘉永六年六月六日の米使節ペリーの浦賀来航時、同役井戸石見守弘道と、その応接掛を勤めた。安政元年六月西丸留守居、同四年二・二十四大坂町奉行となり、同五・八・二十一、任地で没した。この書状は、その没の直前、三月末ごろまでの京都の状況を伝えている。

一、安政五年三月後半（日付未詳）（後欠）（別紙とも）

（袋、後筆）

「戸田伊豆守手簡

安政五年歟」

（斜包紙）

「遠江守様

戸田伊豆守

御請御直披奉望上候

」

(端裏書)
「御請

御一過読後乞御投火奉希候

其后者御起居も不奉伺、懶惰失敬、奉仰海容之处、忽把握朶雲、審動止、萬福之状、深慰鄙衷、抑垂客一条、閑老上京等
二而、御大論愉快、感伏仕候事ニ御坐候、京都之状态、密々申上候様、奉畏候、極密之風聞、左ニ申上候

一、佐倉参内之後、御返答、二月廿三日頃ニ出候由、^①右之内ニ人心居合方御配慮ニ就而者、三家はしめ諸大名之赤心、

今一応被聞召度趣被 仰進、右之御答、当月七日頃被 仰上、人心居合方等者、閑東ニ而御引受被成候段、御答候处、

右ニ而者、別に被 仰進方無之、此上之处者御勘考有之候様、御頼被遊候との御返答ニ相成、右草案者、伝奏東坊城ニ
而、其筋江内打合も有之由、然ル处、二条殿十二日ニ者御参内無之、役儀 御免被仰上、近習之面々、同士十六七人

上書在之、夫々党を立、御築地内人氣立、不容易成形勢ニ有之候处、十七日ニ至り、東坊城役儀御免、^②参内御差留ニ
相成、翌曉御附都築駿河守、卒中ニて病死、^③一説ニ者、自殺ト云々、右ニ而人氣立直り、二条殿御返答、別而筆を被

起候内、廿日頃、右御返答出候哉、相聞へ申候

此儀者、何分筆上ニ認かね候事ニ候へ共、御書中故、承及候まゝ申上候、尤嫌疑も有之故、上京諸役人江、一度
も文通不仕、全く之伝聞に御座候、何分御一己之御聞込迄ニ相願申上候

扱、林大学等当地江相越候せつ承候所ニ而者、三公九卿、皆眞の素人ニて、外夷之情解候者無之趣、迎も御同通りすら
〈とは相済申間敷奉存候

唯今承り申候、右京都之返答者、弥三家はしめ諸大名之赤心、今一応御承知被遊度との御返答ト云々、右故ニ候
哉、上京御目付岩瀬肥後、昨廿五日晚、急出立、道中九日ニて江戸下着、猶又立戻り可申とのよし、^⑤左候而者、急
ニ落着ニ者相成ルましく

官吏者、正廿一日下田江立戻り、当月五日江戸ニ再來と申事、此分ニて京都之御伺相済不申候ハ、既下案の条約江官吏者判いたし候よし、左候而者、当月より五ヶ月めにて、下田を止め、神奈川開港の事ゆへ、嚙々難題可申出、扱再四之御内命ニて、尊策御建白も御坐候由、実此節昔風之腐儒ニ而者、乍(忽か)ち血戦之地と可相成、尤此度之条約相定り候共、永世御安心とは更ニ難申、其後一時燃着之急を避候迄ニ而、此うへ者一段と国力を尽し、宇宙横行、天下之強国と可相成見込ニ無之候而者、益危哉と奉存候、逆も是迄之通り、座して食候心ニ而は行届不申と、切齒仕居候、扱、老拙今般は一言も不申、黙し仕居、不本意千萬ニ御座候得共、関東の諸有司其事を謀り、評決の上、上ニも御納得ニ而、叡慮御伺ニ相成候場合、如何共可致様無之、既に浦賀勤役中同役伊沢者、下田ニ於て条約取結び候得共、更に相談も無之、其後条約之文面、何方よりも御下ケ無之故、表向ニ而者、何も存し不申而も、薪水・食料、舟中欠乏之品被下、代りとして、銀錢可差出、銀錢之不足ニ候ハ、品物を以差置候趣のミ承知仕候、是則、国をあさむく御所置ニや、其実は、貿易ニ有之、其頃も愚衷建言一ツとして貰キ不申、司農奸物之為に攢斥せられ、既に昨年、営中御懇命も御座候事、唯御国家之為、自然之節、一命を 朝恩にかへ候含迄ニ罷居、此節之処、衆論之小田原を嘆息仕居候迄ニ御座候、御賢察奉願上候

——(以下切離れ、後欠)——

(別紙)

從関白殿、東使江被仰之趣、伝奏より右被命之趣被申入候、書付写^⑨

一、応接相済、無異儀開港候共、去冬十二月廿四日被仰進通、畿内并近国之儀者御指除候様被遊度思召候間、摂州兵庫表ハ被相除候様ニ相成間敷哉之事

一、當時 皇居御手薄ニ候間、御不安心ニ思召候ニ付、

皇居四方并畿内近国之内、可然大録之大名、堅固ニ警衛

致候様被遊度思召之事

一、開教港、建商館之儀ハ、當時之處、御製度御行届ニ御座候得共、無厭食夷情、往々反乱之儀出來致間敷哉、御見込之所承り度候事

一、今度之一条、不容易、奉始 神宮ヲ、御代々江被為対候而も、可有如何哉と、深被惱 叡慮候、至此後ニ而も、人心之居合、国家之重事ニ候間、三家以下、大名之赤心被間召度、今一応被下 台命、衆存之書取被入 叡覽候様、致取計有之様可申入候旨、関白殿・大閤殿被命候^⑩

二月

是迄数度雖内願仕候、無御聞入、此節ニ至り、堀田備中守より賄賂ヲ取扱、既関東役人共へ懇願之通、御評定御決談ニも可相成由、風聞承り、以之外之儀ニ候、年來奉畏 朝廷、無甲斐も、奉穢 天照太神之御威徳候儀、誠ニ以歎敷次第二候、仮令三公諸卿たりとも、国賊と於同志者、無程有志之士申合、不残国賊之徒打捨、令知天罪、可奉輝神国武威者也

油紙包之かと付、穴明たる石を結び付、投込有之、開封之處、中ニも入念包候、上書ハ、上之字計り認メ有之右者、安政五年戊午三月 御所御築地之内、堂上方七八軒ニ投込在之よし

- ① 佐倉参内云々 老中堀田正睦、安政五年二月五日、条約案勅許のため着京、九日参内
- ② 東坊城役儀御免 武家伝奏東坊城総長（先に正月同役広橋光成とともに勅使として江戸下向の内命あり、堀田上京によつて中止となる）、三月十一日に辞職を願出、三月十七日、役免せられる。
- ③ 都築病死 禁裏附都築駿河守峰重、三月十七日急病死

- ④ 林大学頭云々〓儒者林煒、堀田老中の上京に先立ち、安政四年十二月二十六日、目付津田半三郎正路とともに入京、二十
九日所司代邸で武家伝奏等と会見、ハリスとの交渉事情等を報告。堀田らの入京を待ち、三月五日京出発、十八日帰府
- ⑤ 岩瀬一たん帰府〓堀田に随行して入京した目付岩瀬忠震は、三月二十五日先発で京発、帰府
- ⑥ 官吏云々〓米使ハリス、安政五・正・二十一江戸発下田へ。三・五再び江戸入
- ⑦ 伊沢云々〓伊沢美作守政義、浦賀奉行在勤（嘉永六・十二・十五〓安政元・三・二十四）中、安政元年三月三日、神奈川
で、ペリーと「日米和親條約」に調印。同五月二十二日、下田で「日米和親條約附録」に調印。
- ⑧ 司農〓勘定奉行川路左衛門尉聖謨、のち安政五・五・六西丸留守居に転
- ⑨ 関白殿〓左大臣九条尚忠、安政三・八・八〓文久二・六・二十三
- ⑩ 太閤殿〓前関白大政大臣鷹司政通、安政三・八・八関白辞任

内容 一、堀田上京、参内後の京都の動き、公卿ら議論紛紜、武家伝奏東坊城の辞職、禁裏附都築駿河守急死に種々のうわさ
等々

一、林煒らの先発入京、京都批判

一、岩瀬忠震の先発帰府

一、一たん下田へ戻ったハリスの動き

一、条約案の内容についての問題点

（別紙）一、堀田への回答

一、（安政五年二月、御所内築地への落文）堀田の奏請に反対

九、伊達宗城宛、岡部長常書翰

続いて、岡部駿河守長常の書状（一点のみ）を示す。

千三百石の旗本岡部長常（彦十郎、右兵衛）は、太田家の生れ、岡部家を嗣ぐ。小姓から出世、安政二年九月十四日

海防掛目付となつてより、注目され、同四年十二・二十八から文久元年十一・十六まで四年間、長崎奉行を勤め、とくに日蘭通商条約交渉、製鉄所、鉾山、英語伝習、蘭医ポンペ J. L. C. Pompe van Meerdervoort (1829. 5. 5 ~ 1908. 10. 3) との接触など、西洋文明導入に大きな役割りを果し、文久元年十一月十六日外国奉行に転じ、のち攘夷派の襲撃も受けている。その後、作事奉行、神奈川奉行、軍艦奉行等を歴任、慶応二年十二月一日没。四十二歳。

一、文久三年二月十六日(別紙とも)

(斜封紙)

「宇和島老公

岡部駿河守

閣下 御直扱

「

拝啓仕候、然者、一橋公江被仰進候途中、礼節之御変定書付写差上申候、是者御用済候ハ、御返却奉願度奉存候、御上洛被仰出之書付差上候、是者御留置ニ而宜御坐候、只今江戸八月十日出両便到來、十三日之御発途無相違有之候筈之旨申來候、右申上度、草々御有恕奉願候、

尤陸路者変候御趣意、種々有之候得共、実尤之次第ニ而、皇国御為相考、御尊崇之相立候様之御苦心より出候義ニ而、英軍艦三隻渡來、猶跡より佛艦も可参旨ニ御坐候、右等之云々認取兼、大略申上候、肅具

二月十六日

岡部駿河守

宇和島老公

閣下

(別紙、状)

二月九日、和泉守殿御渡御書付写

御軍艦ニ而 御上洛可被遊旨被 仰出候処、御都合も御坐候ニ付、来ル十三日 御発駕、東海道筋 御上洛可被遊旨被 仰出候、尤御省略之義も、兼^々而厚被 仰出候趣も有之候得共、猶一際、御供方其外、格別御減略可被遊旨被 仰出候、此段、向々江可被相触候

内容 一、外国奉行在職(文久元・十一・十六、同三・七・十三)中の書状

一、將軍上洛と攘夷実行問題(將軍家茂は二月十三日江戸発)。八月十日出の先発便京都へ着

一、英艦、さらには佛艦渡来に備え、海路上洛は危険

(別紙) 一、(和泉守〓若年寄水野忠精、三月十五日老中〓より達、二月九日付)軍艦にて上洛は取止め、東海道を上洛

一〇、小 結

岩瀬忠震に続いて、永井忠尚、及び戸田氏栄・岡部長常の書翰をとりあげた。

時期的に見て、安政五年まで、すなわち、いわゆる「安政大獄」による伊達宗城の退隠、岩瀬・永井ら幕吏の処分までのものと、文久年間、何れも復権再任を見てからのものに大別される。

前者においては、いわゆる一橋派と総称される諸派大名の仲間と外国奉行・目付等の幕吏たちとの結びつきが、具体的に浮きぼりにされている。又後者においては、「公武合体」の諸潮流の中で、雄藩の一大名である伊達宗城と、復権を得た幕吏層との連携が、きわめて深く、京・坂の情勢、長州征伐への対処など、一つ一つが具体的に記されている。

なお詳細の考究は、別稿を期したい。

(附記)

慶応義塾図書館の所蔵する木村芥舟(図書、喜毅、目付から軍艦奉行へ)関係史料の中に、同人宛の岩瀬忠震の書状があり、『近代日本研究』第五卷(一九八八年)(慶応義塾福澤研究センター)に二五点の紹介がある。解説にあたられた河北展生氏・木村直也氏らのメンバーからの御教示を得、大いに参考にさせていただいた事を深謝申しあげる。

(本稿は、昭和六十一年度文部省科学研究費一般研究Cによる研究成果の一部である)

(一九八九・十・九)